

鉄砲隊の装備

14 世紀から 16 世紀にかけての軍隊は、士官として、また騎兵として活躍するエリート武士と、足軽と呼ばれる農民の足軽の二層で構成されていた。どちらも火縄銃を携帯することができたが、鉄砲隊の大部分を構成する長い射撃隊の列を形成したのは足軽であった。

ここに展示されている鎧は、武士のものである。武士の鎧は、戦場に火器が普及してから金属板を厚くするようになった。しかし、重い鎧でも火縄銃の弾を止めることはできず、鎧は主に剣や槍から身を守るため、また身分を示すものとして使われ続けた。

弾薬は各自が持参した。檜や木綿を編んだ火縄、火薬を入れる大きな水筒と火薬を入れるひょうたん型の容器、弾を 1 個ずつ入れる烏口頸袋、早合を入れる袋、弾を銃身に詰めるためのラムロッド（1 本または複数本）から構成されていた。木箱は戦場へ弾薬を運ぶのに使われた。

鎧の背中には、幟（指物）を立てるための筒が取り付けられている。